

タイムがぶせる50

証言＝渡部典子さん(79)＝西野川1丁目、金崎芳子さん(82)＝同、関根淳子さん(79)＝西野川2丁目、太田良枝さん(76)さん＝西野川3丁目

近くに商店がなく買い物に苦労

◆旧野川が流れていた頃、西野川と東野川は小足立、寛東という地名で、いまも町会はその名前になっています。転居した昭和38年頃は勤め先の千代田区丸の内にあった銀行の支店へ京王線通ってました。家から最寄りの柴崎駅まで18分ぐらい歩きました。帰りは暗い田んぼ道で、夏にはカエルの声がにぎやかでした。電話の市外局番は03でしたが、地名の前に「字」が付いているので「どこの田舎から通っているんだ」と同僚から冷やかされました。◆昭和39年頃、近所に「水車」という屋号の牧場があり、牛乳をわけてもらいました。頼んでおくと、牛乳入りの注文主の名前を書いた一升瓶が現在の「野川のせせらぎ」付近を流れていた小川に置いてあり、家に持ち帰ってわかつて飲みましたが、絞りたてでおいしかったです。その小川は水がきれいで、農家の人が野菜を洗っていました。◆家の近くには商店がなく買い物が大変でした。仙

川駅や柴崎駅などへ出かけて買い物をしていました。子どもが生まれてからは仙川駅まで粉ミルクを買いに行ったりもしています。昭和40年の神代団地完成後は、団地内に銀行、郵便局、薬局のほかスーパーマーケットもできて便利になり、休みには家族で買いものに行きました。また、食料品以外のいろんなものを積んだよろず屋や野菜を積んだ八百屋のトラックも回っていました。その後、御台橋にパン屋ができ、自転車の荷台に木箱を3段くらい積んでいろんなパンを売りに来ました。市制施行の少し前に御台橋には肉、魚、乾物、陶器、ストアもあってにぎわっていました。ただ、雨が降ると周辺が水浸しになって、行くのに苦労しました。



御台橋ストア(昭和48年、『写真で見る昭和の狛江』より)

●市制施行50周年を迎える狛江市。昭和45年頃の街の様子や暮らしを市民の証言や写真でつづります。



◆88◆

有限会社藤和(駒井町3-34-10)は建物の鉄筋コンクリート製の骨組や地下室、基礎、擁壁などを得意とする土木・建設会社。

創業者の佐藤英一社長(78)は、群馬県甘楽町の農家の四男に生まれた。地元の学校を卒業後、世田谷区に住む兄を頼って昭和32年に上京、同区内の建築資材販売会社に就職した。営業・販売の仕事をしながら建築関連の勉強を続けるとともに、ダンプカーやショベルカーなど建築用の特殊車両の免許を取得した。10年以上勤めるうちに中堅として多くの仕事を任せられるようになり、コンクリートミキサー車が普及し始めた44年に「これからの時代、建設現場では生コンクリートが欠かせない」と社長に進言してコンクリートミキサー車を導入するとともに、新たにコンクリート製品を作る工場を建設した。



佐藤さん

佐藤さんは、生コンの事業が軌道に乗った46年に建築関連の新たな仕事を手がけるため退

鉄筋コンクリート躯体工事など手がける

有藤和

職。三鷹市内にあった妻の榮さんの実家で独立の準備をした。この時、都内の仕事を受けやすくするため、市外局番が23区と同じ「03」だった狛江市猪方に借家を見つけて転居、都内の別の会社で働いていた弟の修さん(74)を誘って同年に創業。前の会社の顧客から仕事を受注し、掘削機やダンプカー、ブルドーザー

など重機工事に力を入れた。当時は住宅ブームの最中で、大手の建設会社以外にはコンクリートを使った地下駐車場や鉄筋コンクリートの躯体工事を手がける会社が少なかったため仕事はすぐに軌道に乗り、社員を雇い入れた。

49年に世田谷区宇奈根に事務所と資材置き場、駐車場を設けた。当時はコンビニエンスストアもなく、工事現場近くには食堂も少ないため、子育て中の榮さんが早朝から夫や社員の弁当を多い時は10人前も作って喜ばれたという。

56年に現在の場所に自宅を新築したのをきっかけに駒井町の住民と付き合いが始まった。35年前に駒井町会の役員を引き受け、平成17年に会長に就任、狛江市社会福祉協議会猪方・駒井

地域福祉推進委員会など市民団体の役員を務め、28年に発足した狛江市町会・自治会連合会の初代会長も引き受けるなど、精力的に地域活動を行っている。佐藤さんは世田谷区や墨田区、江東区、大田区、町田市など東京都内だけでなく相模原市、鎌倉市など神奈川県内でもさまざまな仕事を手がけてきた。市内の仕事は多くないが、町会活動などで知り合った農家の依頼で、水田に土を入れて畑にしたり、ナシ畑の根を撤去して宅地を造成する工事などを行った。

独立以来、長年にわたり個人事業主として事業をしてきたが、4年に有限会社として登記。現在は、長女の夫が仕事を手伝っている。建設関連の仕事は波があるため、「大きな仕事よりも身の丈に合った仕事をていねいに多くこなす」ことが信条で、自分の責任の取れる範囲に絞っているという。

佐藤さんは「建設業界は大手ゼネコンの傘下でないとい仕事を得るのが難しい時代になりましたが、誠実に仕事をこなすことで上司やお客様に気に入ってもらい、右腕となって支えてくれた弟の存在があって現在につながっていると思います。また、地域の人たちに世話になりました」と話している。

藤和☎3480-7166、営業時間＝午前7時～午後6時、日曜・祝日休み

昭和46年に創業／「身の丈に合った仕事」が信条

応援しよう飲食店のテイクアウト

紹介ウェブサイトを開設 市役所で昼食の弁当販売

新型コロナウイルス感染症による営業自粛や利用者の減少などで厳しい経営を強いられている飲食店を応援しようとテイクアウトの店を紹介するウェブサイトが好評だ。

政府の緊急事態宣言が出されたのをきっかけに、comaecolor(コマエカラー)ではテイクアウトをしている飲食店と外食を自粛している市民をつなぐことを目的としたウェブサイト「こまえおもちかえりごはん」を4月6日頃からスタートした。当初は数件だったが、狛江市のホームページなどで紹介されたこともあり、申し込む店が増え、5月中旬には40件に達した。

サイトは地図に表示された番号をクリックすると店名、住所、電話番号、店舗紹介、テイクアウトのメニュー、注文方法などが表示される。

狛江市も市内の飲食店を応援しようと5月8日頃から市役所で職員向けに昼食用の弁当の販売を始めた。

14店舗が参加、週3回月・水・金曜日の昼休みに3～4店舗が交代で合わせて40個の弁当を販売している。市の職員が売り子を務めているが、毎回開始から10分ほどで売り切れるほどの人気。市役所の近くの飲食店は営業を自粛しているところも多く、職員からは「市内にたくさんのおいしい店があることがわかって楽しい」という声も



市役所で弁当を販売

聞かれた。

弁当の販売は29日頃まで行うが、終了後は職員に市内の飲食店のリピーターになってもらうことを期待しているという。

音楽イベントが中止に 初夏音とバンドフェス

狛江市音楽連盟(小笠原一恵代表)は「第48回初夏の音楽会(初夏音)」と「狛江バンドフェスティバルvol.22」の開催中止を決めた。

初夏音は昭和48年から市民の手作りの音楽会とし

て続けられ、ことしは過去最多の24団体が出演しエコルマホールで6月14日回に開催する予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大により関係者が検討した結果、延期も難しいと判断、初の中止を決めた。

小笠原さんは「47回続いていた音楽会が途切れるのは残念です。来年の開催に向けて手を尽くしたい。たくさんの方が集い、音楽を楽しめる日が一日も早く戻ってくることを願っています」と話している。

また、バンドフェスティバルも7月12日回開催の予定だったが、公共施設での会議や練習が難しく、今後の見通しがつかないなどとして中止を決めた。

同連盟の山本郁夫さんは「来年は、ことしの分も合わせて盛大なフェスティバルにしたい」と話している。

「音楽の街-狛江」構想を幅広く推進

狛江市は市民の文化・芸術活動を活性化する取り組みのひとつとして、誰もが楽しめる「音楽」によるまちづくりを進めるため、平成18年に「音楽の街-狛江」構想を策定した。

音楽の街-狛江 エコルマ企画委員会は22年に発足し、一般財団法人狛江市文化振興事業団を事務局として、構想に沿ったさまざまな活動を展開している。年間約30回にのぼるさ

まざまな音楽イベントを開催し、市内外のプロやアマチュアのミュージシャンたちが洋楽や邦楽などさまざまなジャンルの音楽を披露し、音楽愛好家にとどまらず幅広い市民に親しまれている。

市民に向けて狛江駅北口交通広場での駅前ライブ、市役所でのロビーコンサートを催すほか、会場へ足を運べない人のためにエリアコンサートを高齢者福祉施



『昨年の文化フェスティバル』

つなげよう 音楽の架け橋

も、小・中学校での学校公演をはじめ、設や保育園などで開いている。「音楽の街-狛江」のシンボルコンサートとなる「こまえ文化フェスティバル」には市内在住の演奏家が多数出演している。また、市議会議場を使った議場コンサートが多くの市民の人気を集めた。

イベントの開催のほかに、プロの音楽家が子どもたちの吹奏楽や合唱を指導する学校音楽活動支援事業など音楽教育にも積極的に関わっている。企画委員会には多くの音楽家や舞踊家などが参加し、企画・運営だけでなくイベントの裏方を務めているのも特色だ。